優秀作品賞

『命、使い切ったら』

松田　祥子さん

行きつけのお好み焼き屋『アツアツ』で、相席になったハルさんからあの話を聞いたのは、つい先日のことだった。私たちは顔見知りだが、素性も本名も知らない常連客同志。その日、ビールを傾けつつ彼女がさりげなく語ったのは、口調とは裏腹の深刻な内容だった。「このたびウチは、危うく三途の川を渡りかけるところでして」と言う。「えっ？　ほんまですか？」思わず反問すると「はい。クモ膜下出血で」と、事も無げに答え、おいしそうに豚玉を頬張った。

なんでも、人間ドックを受診したところ、予想もしなかった異常が見つかり、大事に至る寸前に手術、間一髪の差で助かったとのこと。「MRI の画像見たときは、脚が震えました。脳血管の一部が瘤みたいに膨れて破裂寸前。ようあの時点で見つけてもろたもんですわ」

そもそも、還暦祝いにと娘さんから人間ドック受診券をプレゼントされたのがきっかけだった。オプションに脳ドックが付いていたが、こんなのは必要ないだろうというと「おじいちゃんはそれで亡くなりはったんやから、お母ちゃんも念のために」と説得されたとか。語りながら彼女は、ふと被っていた毛糸の帽子を脱ぎ「これ見てみなはれ」と言った。ほとんど刈り上げに近い半白の頭の後頭部から耳の後ろにかけて、うっすらと手術痕らしいものが認められた。「でもまあ、それで済んでよかったですね。髪なんかすぐ伸びるから、傷跡もじき見えんようになりますよ」と私は励ました。還暦。まだまだ若い。人ごとながらホッとした。

私の両親は、早死にだった。母は胃がんのため入院後わずか二ヶ月で亡くなった。享年三十八。十年後、今度は父が脳梗塞の後遺症で亡くなった。享年五十八。本人たちの心残りもさることながら、遺された私たち子ども四人は途方にくれた。当時は戦後の混乱期からの復興途上で社会全体が貧しく、人間ドックなど望むべくもない時代。今も昔もこうした働き盛り、責任世代の人の病死は戦死同様むごく不条理で、本人や家族だけでなく社会的にも大きな損失だと痛感する。

したがって、私は自分が働くようになったとき（事情があり、私は途中からシングルマザーになった）二人の子の成長を見届けることを最重要課題にした。“石にかじりついてでも”という言葉があるが、まさにそんな気持ちだった。私は、職場の健診のほかに、二年に一回、必ず人間ドックを受診した。幸い、職場からの補助があり、費用の半額を負担してもらえた。両親の亡くなった年齢にさ

しかかった時は神経質になったが、それもなんとかクリア。無事に定年を迎え、ようやく肩の荷を下ろした。子供たちは巣立ち、悠々自適の老後が始まった。自身の健康には、もう一頃のような悲愴な執着はなく、周囲への配慮から、年一回の特定健診を受け続けた。

古希を過ぎた頃から見える景色が徐々に変化し始めた。親しかった友人・知人の訃報が続き、見回せば地域の古いメンバーの半数が鬼籍に入っていた。遠からず自分も、と覚悟を迫られるような気がした。

そんなある日、検診で胃にわずかな異常が見つかった。内視鏡検査を受けるよう指示されたが、気が進まなかった。なぜなら、一昔前は内視鏡検査といえば痛くて苦しいことで有名だったからだ。「最近の検査は楽になっているよ」「器具も技術も格段に進歩してるし」「寝てる間に済むわ」などと周囲の経験者が教えてくれたが、信じられなかった。

検査当日、私はガチガチに緊張していた。検査の恐怖のほかに、母のがん体質を受け継いでいるから、胃の中にはもう立派ながんが出来上がっているのでは、という不安もあった。だが、検査用の椅子に腰を下ろすと固く目を閉じ、来るなら来いと腹を括った。「はい、のどに局所麻酔用のスプレーをしますね」「楽にしてください。内視鏡が入ります。痛くないですか」「今、モニターに胃の中が映っています。あ、きれいですね」私の背後から絶え間なく声をかけているのは、若い男性看護師だ。その音楽のような囁きを聞いているうちに、次第に朦朧となった。麻酔が効いてきたのだ。医師は無言で内視鏡を操っている。

ふと背後の囁きの調子が変わった。「祥子、どうしたがや。胃になんかできとるがか？なあん大丈夫。おまえは母さんとは違うが」「そいが。こん子はもう三人も孫のおる立派なおばあちゃんや。まあよう頑張られたもんだちゃ」「生かされとる間は、一日一日を大切にするがやぞ。命、使い切ったらこちらへ来られ」見なくてもわかっていた。懐かしい両親なのだ。涙ぐんで頷き、ふと我に返った。先刻の看護師の声が聞こえた。「はい、終わりましたよ。お疲れさま。後ろのソファーで三十分ほど休んでから、お帰りください」検査は痛くも苦しくもなく、結果は異常なしだった。

お父さん、お母さん。私、もうしばらくこの世の景色を見ていてもいいですか。